



目次

- | | |
|---|--|
| <p>P1 秋季企画事業 邑久長島大橋架橋30周年
ドキュメンタリー「もうひとつの橋」上映会&トークイベント開催</p> <p>P2 「古典・民謡コンサート」開催 春季企画展付帯事業</p> <p>P2 豆記者が回復者にインタビュー！
夏休み自由研究応援企画開催</p> | <p>P3 資料紹介 その① 回天病院の黒板</p> <p>P3 研究から 聞き取り調査について</p> <p>P4 資料館の現場から その⑧
社会啓発課の活動について</p> <p>P4 お知らせ／利用案内</p> |
|---|--|

秋季企画事業 邑久長島大橋架橋30周年

ドキュメンタリー「もうひとつの橋」上映会&トークイベント開催

今年は1988年の「邑久長島大橋」架橋から30年にあたります。そこで秋季企画事業として、当館所蔵資料の中から、1983年に山陽放送によって制作されたドキュメンタリー番組『もうひとつの橋』の上映会と、関係者によるトークイベントを開催します。

この橋は、瀬戸内海に浮かぶ離島・長島にある療養所・邑久光明園および長島愛生園に隔離された人びとと、対岸に広がる「社会」とをむすぶと共に、隔離と開放、差別と交流を象徴する重要な場となってきました。対岸との距離が30m以下と近いにもか



本土側から見る邑久長島大橋。

かわらず、架橋に足かけ17年を要し、「人間回復の橋」とも呼ばれています。

上映作品は、長島愛生園を舞台に制作され、「地方の時代映像祭」グランプリを受賞しました。入所者による架橋運動を背景に、園内における文芸活動や音楽活動、島内の高校卒

業と同時に社会復帰してゆく若者たちの姿を伝える貴重なドキュメンタリー作品ですが、これまで視聴する機会はきわめて限られてきました。架橋30周年の今年、山陽放送の協力を得て、上映が実現します。

また、上映会当日、作品の舞台となった長島愛生園から架橋運動当時をよく知る中尾伸治さん（長島愛生園入所者自治会会長）をお招きして、架橋への思いを語っていただきます。東京で、長島愛生園入所者の体験を聞くことのできる貴重な機会です。

上映会&トークイベントを通して、「私たちの心に橋は架かったか」、「この橋を私たちが人間回復の橋にしていけるかどうか」という現在進行形の問題を受け止めていただくきっかけとなれば幸いです。この機会に、ぜひ当館に足をお運びください。

（木村哲也）

日 時：2018年11月23日（金・祝日）
14：00～16：00（13：30開場）

会 場：当館 映像ホール

上映作品：『もうひとつの橋』
1983年 山陽放送制作（47分）

ゲ ス ト：中尾伸治さん
（長島愛生園入所者自治会会長）

入 場 料：無料（申込不要、先着順140名）

※予定が変更になる場合がございますので、当館ホームページをご覧ください。

「古典・民謡コンサート」開催 春季企画展付帯事業

2018年度春季企画展「この場所を照らすメロディーハンセン病療養所の音楽活動」は7月31日(火)をもって終了しました。会期中、ご来場いただいたみなさまに、厚くお礼申し上げます。

7月8日(日)、企画展の付帯事業として「国立ハンセン病資料館 古典・民謡コンサート」を映像ホールで開催しました。最初に、仲里朝篤氏(三線野村流師範、沖縄愛楽園)と小底京子氏(琉球箏曲興陽会師範、沖縄愛楽園)による琉球古典(琉球王朝の宮廷音楽)3曲が披露されました。厳かなメロディと仲里氏の朗々たる歌声が、観客を魅了しました。

二番手として登場したのは、星塚三線同好会(星塚敬愛園、鹿児島県)のみなさんです。星塚敬愛園は、沖縄・奄美地方出身の入所者が多く、同会は沖縄の音楽を愛好する入所者、療養所職員、近隣住民らが一緒になって活動しているサークルです。今回は入所者2人を含む14名に加え、仲里氏、小底氏も飛び入りで出演しました。踊りやエイサーを交えて、沖縄民謡6曲を披露し、持ち前の明るさで会場が温かい雰囲気になりました。

トリをつとめたのは、おもだか秋子氏(民謡歌手、津軽三味線澤田流・澤田勝女)です。「津軽じょんから節曲弾き」などのほか、ハンセン病療養所が所在する地方の民謡をメドレー形式で披露しました。演奏中に踊り出す観客もいて、観客の心を惹きつける圧巻のステージでした。

観客は約120名が集まりました。アンケートでは、「心が震えた」、「出演者と観客が一体となって幸せを実感できた」、「定期的に開いてほしい」といった多くの声が寄せられました。(大高俊一郎)



星塚三線同好会の発表

豆記者が回復者にインタビュー！ 夏休み自由研究応援企画開催

資料館では、昨年に続き小学生を対象に「夏休み自由研究応援企画」を開催しました。7月29日(日)には「多磨全生園のフォトブックを作ろう」、8月18日(土)には「回復者へインタビュー！記者になってみよう」をそれぞれ開催、暑い夏にも負けない、熱気にあふれた催しとなりました。

今回初の試みとなった「回復者へインタビュー！記者になってみよう」は、回復者の方をお招きし、お話を聞いたり質問をしたり、記者のようにインタビューをしてみようという企画でした。



おそろいの腕章をつけ、記者風のメモを手にした8人の豆記者が回復者を取り囲み、丁寧にその話を聞き取りました。発症前の幼少期、故郷の山や川を縦横無尽に駆け巡ったというお話、学齢期に病気が見つかった時の気持ちや収容時に見た光景、社会復帰した時の恋のエピソードから今の暮らしのことまで、皆、真剣に耳を傾けました。視力を失ってから始めたという陶芸のお話では、自分たちも目をつむり、実際に作っている心持ちで作品の感触を確認しました。

回復者から聞き取ったことを題材に、各自が壁新聞や作文、絵日記などの夏休みの宿題に役立てるという本企画。後日参加者より完成した宿題の写真が送られてきました。考えながら重ねた質問と、それに対する回復者からの回答のひとつひとつが綴られ、当日見学した資料館の様子などと共に充実した内容の新聞に仕上がっていました。

ハンセン病を生きた人の歴史が、この夏、参加者それぞれの胸に深く刻まれたことと思います。

(大久保菜央)

資料紹介 その①

回天病院の黒板



当館の収蔵庫には、65,000点以上の資料が保管されています。しかし劣化具合や個人情報、展示ストーリーや展示スペースの都合等から、普段ご覧いただける資料はごく一部に過ぎません。そこでこのコーナーでは、収蔵庫内の資料を紹介していきます。今回は、「回天病院の黒板」です。

国のハンセン病対策が始まる前から、各地には私立の「癩病院」が存在していました。1881（明治14）年設立の回天病院は、現在の岐阜県土岐市にありました。設立を呼びかけるパンフレット「回天病院設立広告」からは、地元の善意と出資で誕生したことがわかります。起廃病院の後藤昌文に学んだ遠山道栄が治療にあたり、「岐阜県統計書」によると明治末までは、他の病気も含め多い時で年間6,000人近い患者を診察していました。岐阜県の産業を紹介する冊子「美濃乃魁」には、立派な建物の挿絵が掲載され、他県に誇る存在だったことがうかがえます。

「癩予防二関スル件」施行後の1910（明治43）年頃、回天病院は「癩病院」から「一般病院」となりました。昭和前期には名称も遠山医院に変えました。しかし引き続き、ハンセン病の治療を求めて訪れる患者もいたようです。1997（平成9）年頃閉院、2009（平成21）年1月に建物が取り壊されました。

この黒板は、葉の記録や古い医学書等と共に、遠山様からご寄贈いただきました。深緑色が主流となる前の黒い木製の板面で、明治後半から昭和前期の製造と考えられます。裏面に「回天病院 遠山」と墨書され、閉院時は待合室に掛けられていました。療養所や大学病院とは異なる、地域の私立病院とそこでの治療の存在を、今日に伝える資料です。

（稲葉上道）

研究から

聞き取り調査について

回復者の高齢化と減少を受けて資料館では2015年度から聞き取り調査を実施しています。回復者の証言を音声・動画などで記録し、未来に向けて保存していく事業です。2018年9月現在で81名の回復者の証言を収集しています。

この聞き取り調査は、基本的にはすぐの公開をせず、まずは記録として残すことに重点を置いています。公開を前提にすると、家族や周囲を気にして本心を話せなかったり、これまで講演活動や取材を受けたことがない方々を躊躇させ、協力者の数を限定してしまったりする可能性があるからです。できるだけ多くの、そして「本音」の証言を収集することが目的です。そのため、1回の聞き取りで終えず、協力者と相談しながら複数回の聞き取りをお願いしています。何度もお会いして親密な関係を築き、これまでお話していただけなかったことや、その時々で変わる思いを残していきたいと考えています。

回復者の証言を記録として残すことはとても重要です。回復者にとっては、これまでの人生が意味のあるものだ実感する機会となります。学芸員にとっては、証言から学び、様々な啓発活動に活かすことができます。そして社会にとっては、ハンセン病問題を記憶していくことであり、将来の様々な差別問題に対して、回復者の経験を活かすことにもつながっていくのです。

これまでご協力いただいた方で、残念ながら亡くなられてしまった方もいます。残された時間が少ない中、どれだけの回復者の証言を残せるか。資料館の将来にも関わる大事な仕事だと思っています。

（田代学）



聞き取り調査で使う道具

資料館の現場から その⑧

社会啓発課の活動について

今回は社会啓発課の活動について紹介します。当館の館内における教育普及活動は、第95号でお伝えした通りですが、2014年8月、主に館外に向けた啓発事業を強化推進するために社会啓発課が2名体制で発足しました。

当館における教育普及活動は長く、お二人の語り部による活動がその中心となっておりましました。現在も当事者である語り部のお話を聞きたいという声は多いのですが、高齢のため遠方に出向くということとは難しくなってきました。社会啓発課ではそうした声にお応えするため、発足以来、外部講演や語り部DVD・啓発DVDの作成、啓発用パンフレットの作成など啓発事業を強化推進するための活動を行ってきました。また、一般の方向けに「ハンセン病と人権」夏期セミナーを毎年開催し、今年も全国各地から多くの方に参加していただきました。

特に社会啓発課学芸員らによる外部講演は、地方自治体や教育委員会、社会教育施設など社会人向けだけではなく、小学校から大学に至るまで、次世代を担う若い人達への講演希望が全体の半数を占め、ハンセン病患者・回復者の歩んできた歴史を通した学びを深めようとする希望者の多さを実感いたします。外部講演への参加者数は毎年増加傾向にあり、昨年度は60件、当館来館者数の約25%にあたる8,000人以上となりました。今後もこれを機に参加者自らが当館や他園の社会交流会館に足を運び、周りの方々に伝える役割を担っていただくことを望みます。

(金貴粉)



7月27日開催「ハンセン病と人権」夏期セミナーの様子

お知らせ

■ギャラリー展

・写真展「『するが』～富士のすそ野に生きて」
日時：9月22日（土）～10月12日（金）
主催：写真家 黒崎彰&動物介在活動 ぱらす

・「多磨全生園まつりにおける人権パネル展」
日時：11月3日（土）
主催：東京法務局人権擁護部

・「草津のかあさま コンウォール・リー女史と聖バルナバ・ミッション展」
日時：11月7日（水）～11月11日（日）
主催：日本聖公会北関東教区聖バルナバ・ミッションとリー女史記念事業推進委員会

※いずれも入場無料です。

その他、決まり次第ホームページに掲載します。

利用案内

■開館時間 9：30～16：30（入館は16：00まで）

■休 館 日 毎週月曜日（祝日の場合は開館）
年末年始、国民の祝日の翌日、
館内整理日

■入 館 無料

■交 通

- ・西武池袋線 清瀬駅南口より
西武バス「久米川駅北口」行バスで約10分
（「ハンセン病資料館」下車）
- ・西武新宿線 久米川駅北口より
西武バス「清瀬駅南口」行バスで約20分
（「ハンセン病資料館」下車）
- ・J R 武蔵野線 新秋津駅より
西武バス「久米川駅北口」行バスで約10分
（「全生園前」下車、徒歩10分）
または徒歩約20分

〒189-0002 東京都東村山市青葉町4-1-13
TEL 042-396-2909 FAX 042-396-2981
URL <http://www.hansen-dis.jp>